

# 聖凱氏のコメントに対する回答

奥野 光賢

(日本 駒澤大学)

まず、最初に聖凱先生より、本発表に対するコメントをいただいたことに対し感謝したい。さて、私の今回の発表は、その冒頭でもお断りしたように、昨年の第1回韓・中・日国際仏教学術大会において、小菅陽子氏や中西久味氏の近時の研究を受けて、「吉蔵の文献に現れた一乗と仏性との関係——乗仏性説を中心として——」を発表された韓国金剛大学の崔恩英教授の発表に触発されて、真諦三蔵に絡めて従来の私の「吉蔵の仏性思想」を見直したものであり、その意味では再論が多いという譏りは否めないことは十分に自覚している。ただ、私の今回の発表の意図は近年の研究において、従来の私のそれがどのように位置づけられるかを確認したかったという点にあることをご理解いただきたい。それゆえ、吉蔵と真諦三蔵に関わる撰論師、撰論学派に対する考察がなされていないという聖先生のコメントはまったくそのとおりであり、あえていえば今回は当初からそこまでは視野に入れていなかったというのが正直なところである。

それはともかく、ご指摘を受けた諸点については、次のようにお答えしておきたい。天台智顛がその晩年に撰述したといわれる『維摩経玄疏』(大正蔵 38.528b)に、(1)地論師と撰論師 (2)地論師と三論師 (3)地論宗南道派と北道派の間のそれぞれの論争についての記事があることは周知のとおりであるが、この記述からも知られるように確かに吉蔵の「地論師」「撰論師」に対する対応を見ることは重要な問題といえよう。そして、実はこの問題については、吉蔵の対破教学という観点から、すでに重要な先行業績が存している。すなわち、私の所属する駒澤大学の吉津宜英博士の次の2つの論文がそれである。

- (1)「吉蔵の教学と破邪の構造——唯識大乘義批判を中心として——」(『駒澤大学仏教学研究会年報』第4号、1970.3)
- (2)「吉蔵の唯識大乘義批判」(『印度学仏教学研究』第19巻第1号、

以下、吉津論文を要約するかたちでお答えしてみたい。

吉蔵の最初期、すなわち会稽嘉祥寺時代を代表する著作に『法華玄論』があるが、同論には『撰大乘論』『十地経論』の引用が見られる。特に前者については比較的数量多く言及する。また、地論師については、八識説や教判、仏性等に関する箇所而言及するが、撰論師に関する言及はほとんどみられない。つまり、この時代の吉蔵は撰論学を自己の対破教学として意識していなかったものと思われる。

これが長安日嚴寺時代の『浄名玄論』になると、(1) 智度論師 (2) 地論師 (3) 撰論師の説をそれぞれ実相般若・阿梨耶識・阿摩羅識と要約的に列挙して批評し (大正 38.856c)、さらに『撰論』の「無塵有識説」に関しても論評を加えているほか、『中観論疏』などでは、随所に地論師、撰論師に対する批判が見られるようになる。特に『十二門論疏』『観因縁品』第1では、『中観論疏』の四重二諦を受けて、この四重二諦はまさしく「地論」「撰論」の中道説を対破するためのものであると述べている (大正 42.184a)。また『百論疏』『破空品第十』では「撰論」「十地」「地持」の長安の三種の論師たちが二無我三無性に執しているから、この一品は破二無我品・破三無性品とも名づけ、彼らの立場を破斥するのだと主張している (大正 42.302b)。しかし、吉蔵にあっては、例えば『中観論疏』では『中論』の偈の中に阿梨耶識説を読みとったり (大正 42.107a)、『百論疏』の序疏では「三論の中にも唯識の義あり」 (大正 42.237b) 述べるなど、一面では肯定的ともとれる表現もあり、その対応は批判一色ではないように思われる。思うにこれは「諸大乘経 (論) 顕道無異」を標榜する吉蔵の姿勢と無縁ではないと考える。